

知ったかアート大学取手校ゼミ 2019年修学旅行レポート

「アート」と「アートでないもの」、また「そのどちらでもないもの」があるとすれば



青い色が好き。

だから、空の色が好きだ。

見上げるとすぐに好きな色に出会えることは、幸せなことだと思う。

特に、夏の空はいろいろな青い色を見せてくれる。

修学旅行に向けて、家を出てから、ずっと、空を見上げていた。

あのまちは、どんな空の色なのだろうかと思いながら。

空を見上げると、視界の片隅に、そのまちの様子が見える。

車を走らせるにつれ、灰色の建物たちが少なくなる。

そして、空を見上げながら、思わず、空の下に広がる鮮やかな緑に、はっとする。

なんと、堂々と、ずっと、そこにいるのだろう。

クリスマスツリーのような尖った木々は、杉の木なのだろうか。

空と、大地に広がる緑の豊かさ。

稲がゆらゆらと実る緑、空の青と、雲の白。

「アート」と「アートでないもの」、また「そのどちらでもないもの」があるとすれば。

課された問いを繰り返す。まず、この問い自体が難解である。

アートとアートでないものだけでなく、そのどちらでもないものが、あるのだろうか。

アート。

趣味は、読書と映画鑑賞と美術鑑賞だと、思ってきた。でも、私はなぜ美術鑑賞が、アートに触れることが、好きだと思ってきたのだろうか。

そもそも、アートとは何なのだろうか。

出発前、旅のしおりで、この問いを課された時から、ぐるぐると回っている。

アートとは何か。

少し途方に暮れてしまい、思わず辞書を引く。

アート。「芸術、美術」

それは日本語に訳しただけのような答えで、ますます途方に暮れてしまう。

今度は、芸術で引いてみる。

「特定の材料・様式などによって美を追求・表現しようとする人間の活動。および、その所産。」

少し、具体的になった。でも。「美を追求・表現しようとする」という文言が引っかかる。

美の追求がアートなのだろうか。少なくとも、私はそれだけではない気がする。

この旅で、私のことばで、アートとは何かを語れるようになれるといいけれど、難しそうだから、まずは、なぜ私はアートが好きなのか、向き合ってみよう、と思った。

美術にあまり関心のない主人と、自由奔放な3歳の子どもと一緒に参加した修学旅行。主人になかば無理を言って連れてきてもらったこともあって、新潟に向かう道すがら、私は少し緊張していた。

集合場所は、ナカゴグリーンパーク奥の駐車場。

鮮やかな緑の中に、麦わら帽子の悠さんが見えた。

豊かな緑色と麦わら帽子の悠さんに、少し安心する。



最初に向かったのは、光の館。

ジェームズ・タレルの作品。昔、直島でタレルさんの作品、ずーっと暗闇にいとだんだん目が慣れてきて、すると眼前に四角い形が現れ、お部屋に入った時は身動きすら取れなかったのに、歩いてお部屋から出られるようになるという不思議な作品に出会った。その時以来の、タレルさん。光の館に行って、読みたくなったらどうしようと思ったので、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」も旅行バックに詰め込んできた。

畳のお部屋。スタッフの方が案内してくれる。

お部屋に入ると、一緒に修学旅行に参加するゼミの仲間が先に畳に座っていた。会えてうれしい。知っているお顔が見えて、安心する。

畳のお部屋の天井は、開いたり、閉じたりする。

開くと空が四角く、切り取られる。

天井が開いたり、閉じたりすると、畳のお部屋に流れる空気の流れも変わる。

天井からの光が作り出す、障子にうつる影も。

あけ放たれた窓から入る風に吹かれて眺めている。切り取られた空を。光が作り出す影を。



主人と子どもは縁側で遊んでいた。

主人は言う。「光とかなんとかはよく分からないけれど、縁に囲まれたここは良いところで、ほら景色もいいんだよ。気持ちいいね。」作品を味わいつくそうとか、芸術を理解しようという気負いが一切ない、この人の素直な感想が、私はとても好きだ。それでいいんだと、安心する。

子どもは、お庭の飛び石と1階にあるお風呂が気に入ったようで、飛び石をぴよんぴよんしながら、お庭からお風呂場に行き、「大きいお風呂、入りたいねえ」と言う。「今日も明日も大きいお風呂。一緒に入ろうね。」と頭をなでる。

何と愛しいのだろう。子どもの手には、さっきゼミの仲間がくれたクッピーラムネが握られている。昔読んだ絵本のような外袋の鮮やかさと、ラムネというずっと消える儚さを兼ね備えたこの小さな粒を、美しいと思う。

アートゼミの修学旅行なので、アート作品をたくさん観た、気がする。

でも、不思議と心に残るのは、作品そのものよりも、その周辺にあるものだ。作品の中にいる主人と子ども、その作品にめぐり合わせてくれた人たち、空、雲、懐かしさを感じる

街、実り始めた稲、濃い緑の木々、それらの中にある自分という存在。
そして、アートが、辞書の示す意味の通り、美を追求するものであるなら、それは自然から十分に与えられるものなので、敢えて人間が行う意味などあるのだろうかと思う瞬間があった。
それを強く感じたのは、昉平だ。



昉平に行ったのは、午後の暑い時間だった。でも、うだるような暑さと厳しい日差しの記憶は不思議とない。心に残るのはいつか夏休みに図書館で借りてきて読んだ、児童文学の何かのお話に出てくるような、夏の山の集落のその風景。ぼんやりと光でかすんでいて、懐かしい匂いがする。集落の上の方には、神社があつて、階段をのぼると、ぽんぽんと、音がする。それはきっと、神様に誰かが訪れることを知らせる音。神様は夏の昼下がり、うたた寝をしながら、そのぽんぽんという音で目が覚める。そして、その足音の主の話を目を閉じてうんうんと聞いたら、足音と背中を見送る。そして、その後、少し空を散歩する。空から大地を、そこに根を張り、生きるすべての命を抱きしめるように。昉平の坂道を、電車が大好きなわが子が、「シュッシュポッポ」と意気揚々と走る後ろ姿を眺めながら、そんなことを考えていた。



昴平は、夜の色も深かった。家の中に入ってきてしまっているのではないかと、足がすくむほどの蛙の鳴き声。子どもの寝息と蛙の声を夜の深い闇の中で聞きながら、知らぬ間に眠り、はっと目を覚ましたのは、夜とも朝とも言えない隙間の時間だった。夜ほど深くはないけれど、うっすらとした、でもまだ濃い青。聞こえるのは、かすかな蛙の声と、蟬の声。窓から見える青の変化を一瞬たりとも見逃したくなくて、息をひそめて、窓の外を見守る。たぶん蟬の声ではあるのだけど、その種類は変わり、蝸のような鳴き声も聞こえる。そして、青がより淡くなり、白にちかくなると、山は目覚め、鳥がさえずる。インスタレーション。そう、長い時間をかけて楽しむインスタレーションを観ているようだった。自然がこんなに素晴らしいものを作り出してくれるのだから、人が何かを作り出す意味はあるのだろうかと思った。

そして、課された問いに、舞い戻る。

「アート」と「アートでないもの」、また「そのどちらでもないもの」があるとすれば。この問いを目にした時からずっと気になっているのは、「そのどちらでもないもの」。もしかしたら、自然が作り出す美しさは、「そのどちらでもないもの」なのかもしれない

と思う。

「アート」と「アートでないもの」、また「そのどちらでもないもの」。

この3つを、対象となる事物とそれに接する者との感情の関係で考えてみる。

対象となる事物は、『「何らかの表現をしたいという意味」を持つ者が存在して、手を加えられたものであるか否か』、で分類してみよう。

それに接する者の感情は、分類の仕方に悩む。辞書で調べた「美の追求」ということばは一つの真理なのかもしれないと思うが、美という概念も曖昧な感じがするので、分かりやすく、『快か、不快か』で考えてみようと思う。

そうすると、「アート」と「アートでないもの」、また「そのどちらでもないもの」。は以下のように、定義づけできるのではないかと考える。

受け手の感情というのは、快か不快の2つに分断されるものではなく、その間には濃淡があるが、分かりやすくするため、敢えて表で示す。

		受け手の感情	
		快	不快
対象事物における「表現する意思」と「技術」の存在	あり	アート	対象事物の作り手：アート 接する者：アートではない
	なし	そのどちらでもない	この判断基準対象外

何かを表現したい者がいて、あるものを制作した。おそらくその時点でその事物は作品となり、アートとして成立している。その作品に接する者が「快」、もっと言えば、「不快」と感じなければ、アートであり続ける。しかし、その作品に接するものがもし、「不快」と感じたら、それは接する者にとってはアートではなくなるのだと考える。

一方、表現する意思も技術も存在しないけれど、接した者に「快」という感情、見たものの心を動かすものであれば、それは「そのどちらでもないもの」になるのだと思う。







たぶん、この修学旅行で、私は「そのどちらでもないもの」にたくさん心を動かされてきた。自然。ふとこぼれる主人の素直なことば、自由に遊びまわり、人との出会いとその人たちと共に過ごせる時間を全身で楽しむ子ども。十日町で出会った方々。では、「そのどちらでもないもの」があれば、アートは必要ないのか、と問われれば、そうではないとはっきり言える。むしろ、そこにアートがあったから、上の表でいう「この判断基準対象外」として見過ごしてしまうこと、そもそも会うこともできなかつたものに、私は出会い、心動かされ、「そのどちらでもないもの」になったのだ。





astoで大地の芸術祭の好きな作品について、ご自身のことばでたくさんの気持ちをのせてお話してくださった十日町の皆さん。宿に帰って、子どもも主人も眠ってしまっから、芸術祭のマップを広げ、悠さんの「ART MAP WORD」を片手に、みなさんのことばやおすすめの作品を思いだしてみる。「ART MAP WORD」でastoでお会いした上村さんが「朝、一人で向き合いたい作品です」とおっしゃっていた作品が近くにあると知り、朝、散歩することにした。朝のお散歩は、旅先での恒例行事だった。子どもも一緒に旅に出るようになってから、行かないことも多いのだけれど、この日は絶対に行きたいと思った。人との出会って、そういう力があると思う。思ったより遠くて、心が折れそうになったけれど、朝露に濡れる稲穂を眺めたり、空を見上げたりしながら、鼓舞した。そして辿りついたのは、「アスファルト・スポット」。大地がうねるようにアスファルトが隆起した作品。見た瞬間、阪神大震災の倒れた高速道路を思い出してしまい、足がすくんでしまった。でも、せっかくここまで来たのだからと、作品を一回りする。地面の下から、田んぼが見える。そそりたつ地面の上に登ろうとした瞬間、ぐっと足に力が入るのを感じた。今までその足を使って歩いてきたのに、普段何も感じなかった力を、ここで、感じた。そして、アートってこういうことなのかなと思った。普段意識しないことを感じさせる、考え

るきっかけをくれる技術。アートの語源の一つは、ギリシャ語の「テクネ」技術だったことを、迷走しながら引いた辞書の中で見たことを思い出す。
アートがなければ、出会えなかった方々との出会いを通じて、またアートに出会う。
私にとって「アート」と「そのどちらでもないもの」はつながり合うものである。



絵本と木の実の美術館は、わが子が主人公の冒険絵本を読んでいるみたいだった。
最初は怖がっていたけれど、お父さんの手を引いて、私にしがみついて、校舎をめぐる。
思い出を食べるお化けとやっと友だちになれて、小さなお庭で暮らすお友だちの家に遊びに行けたけれど、あいにくお友だちはお出かけしていたので、「きっと、またね」と言い、最後はお父さんに肩車をしてもらって、校舎とたくさんの思い出たちにバイバイする。
アートと地域の関わりについて、今の時点では私はまだ知識もないし、十分に考えられてもいない。だから、手放しで賞賛することは避けた方が良くと思う。でも、「学校をかっぱにしない」という気持ちで満たされたこの美術館を、私は素直に素敵な場所だと思ったし、こういうことができるから、やっぱりアートが好きだし、私たちが生きる上で

アートは必要だと思うのである。



なぜ私はアートが好きなのか。

もう一度、自分に問うならば、答えは「自分の心の動きを感じたいから」なのだと思う。感動したいとか、そういうわけじゃない、むしろ、暴力的なまでの感動の押し売りは嫌いだ。何かを受け取って、それに対して、私はどう感じて、それを受け取ったことで、私の何が変わるのか、変わらないのか、その過程を丁寧に丁寧に感じ取っていきたいのだ。そうすると、この世に生まれて、今まで生きてきてよかったと、これからも生きて、多くのものに出会いたいと思えるのである。